

古代びとの景観認識

— 『播磨国風土記』 賀毛郡檜原里条 「飯盛嵩」を中心に —

中村 弘

はじめに

平成一六年（二〇〇四）、日本でもようやく景観に関する法律、景観法が公布された。文化財に關しても同年に文化財保護法の一部が改正され、「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」（文化財保護法）を文化的景観とし、特に重要なものを重要文化的景観として選定し、保存活用される仕組みが整った。

この景観という語句について、国語的には「①風景外観、けしき、ながめ。また、その美しさ。

②自然と人間界の事とが入りまじっている現実の

さま。」とされており、学術的には地理学をはじめ、ランドスケープデザイン学、建築学、造園学、土木工学、社会工学などで様々な観点から定義づけられている。こうした景観は眺めるもの「景」と、眺める主体「観」からなるものであり、¹⁾ 感覚的、視覚的にとらえることができる個々の景観の構成要素（＝景観要素）が相互に關係しながら景観を形成しているといえる。

さて、奈良時代初め（七一三年）の官命を受けて作成された『播磨国風土記』には、視覚的にとらえられる景観要素が郡里ごとに多く記載されている。もちろん、それらは本来存在したであろう景観要素のすべてではないものの、地名起源説話の存在というフィルターによって抽出され記録されたものであり、景観要素をまさに主観的にとら

えた表象であるといえよう。そこで本稿では、『播磨国風土記』に記された視覚的にとらえられる「景」の全てを景観要素としてとらえ、地名起源説話にうかがえる地域の人々の景観認識の在り方について、賀毛郡檜原里条に記載された「飯盛嵩」を中心に考察する。

一 「飯盛嵩」とその周辺の環境

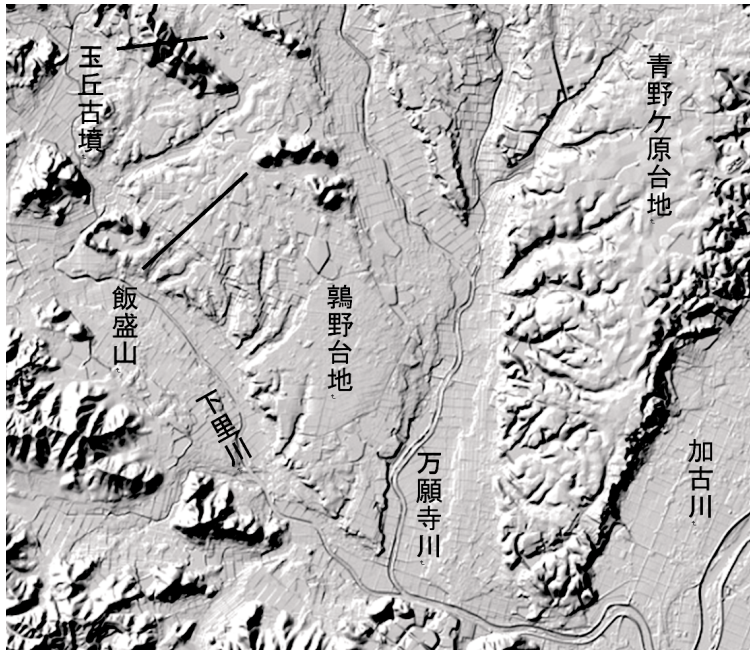


図1 飯盛山とその周辺の地形

「飯盛嵩」は『播磨国風土記』賀毛郡檜原里条に以下のとおり記載されている。

飯盛嵩。右號然者、大汝命之御飯、盛於此嵩。故曰飯盛嵩。

(飯盛嵩。右、然号くるは、大汝の命の御飯を、この嵩に盛りき。故れ、飯盛嵩と曰ふ。)

檜原里は兵庫県加西市の南東部から小野市にまたがる地域にあたり、玉丘古墳^④を指すと考えられる「玉丘」「玉野」といった地名が確認できる。

東播磨地域には南北に貫く一級河川の加古川が南へ流れており、「飯盛嵩」の比定地である「飯盛山」はその支流である万願寺川とさらにその支流である下里川に挟まれた鶉野台地と呼ばれる台地の北方付近にある(図1)^⑤。

飯盛山は独立した丘陵の西端にあたり、現在の地名は加西市豊倉町字飯森で、流紋岩質ガラス質凝灰岩からなり、植生はやせた陽当たりのよい場所に生育するアカマツ―モチツツジ群落である^⑥。なだらかで均整のとれた円錐形の山容であり、特に、東側に連続する丘陵が背後に隠れる西側からの眺望が良く(写真2右上)、そこには「飯盛」



写真1 1965年の航空写真と字名



写真2 飯盛山

- 右上：字「飯盛」より
- 右中：字「飯盛野」より
- 右下：字「飯盛前」より
- 左上：三盛大明神

の字名が残されている（写真1^⑦）。現在、この場所は昭和五〇年（一九七五）頃の宅地開発によって市街化されているが、それ以前は山林であり、南側に隣接する野田池の形状から見て、谷に挟まれ舌状に張り出した地形を含んでいることが明らかである。

この他にも「飯盛」に関連する字名が、飯盛山北方に「飯盛野」、南側に接して「飯盛前」があり、飯盛山の存在する「飯森」を北、東、南の三方から囲んでいる。この「飯盛野」「飯盛前」の両字名の場所から飯盛山を望むと、東側に連続する丘陵があるために完全に独立した山容とはならないが、丘陵との接続部分が低い位置にあるため、円錐形の均整のとれた形状を大きく損ねるものとはなっていない（写真2右中、右下）。

このように、飯盛に関連する字名が周辺に残されているのは自然景観が単独で存在しているのではなく、人が美しいと感じる自然景観に対して主観的に認識した結果であり、地域の人々はその景観の背後に大汝命の御飯を盛ったという説話を生み出し、共感し、「景」を「観」したのである。

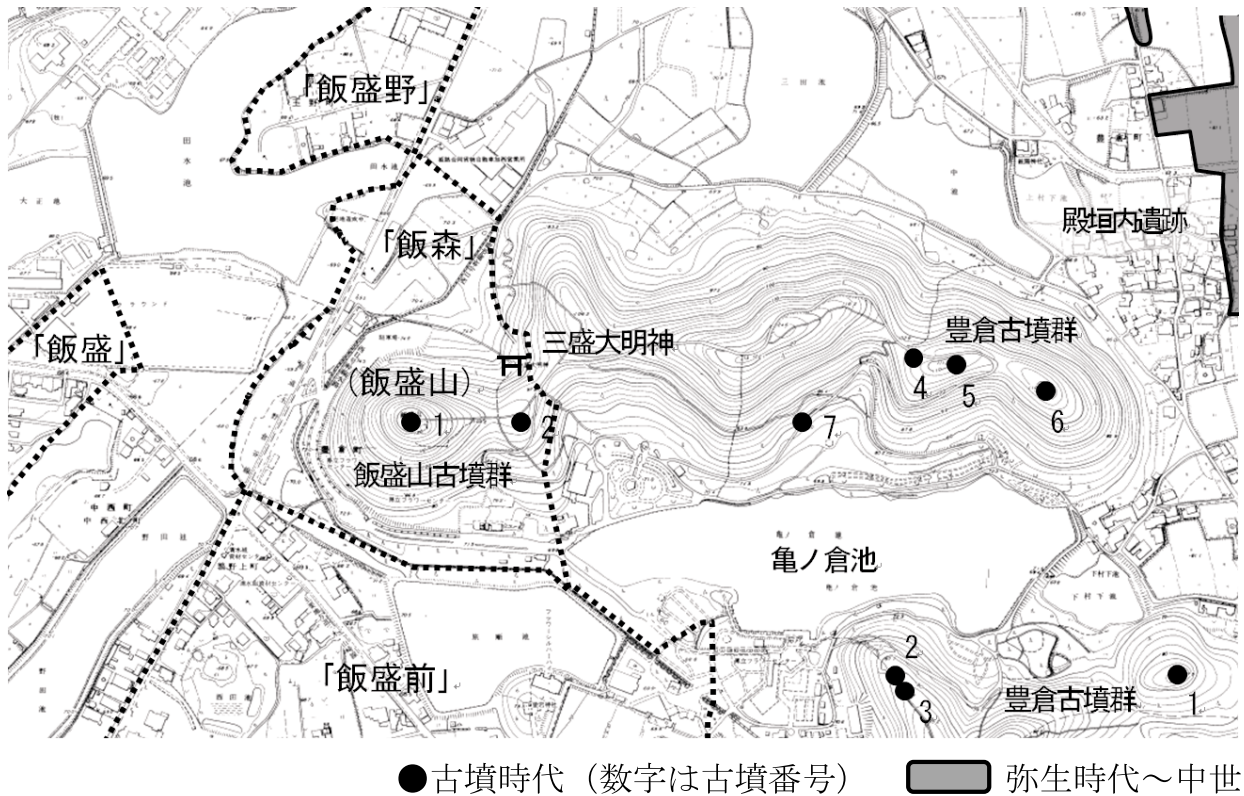


図2 関連遺跡分布図

次に、飯盛山周辺における風土記成立以前の歴史的環境について図2^⑧に示した。飯盛山南東側の亀ノ倉池周辺からは旧石器時代のナイフ形石器や縄文時代の石鏃が採集されているが、図では省略し、かつ古代以降の遺跡も省略している。

分布図から飯盛山周辺の丘陵には古墳が築造されていることがわかる。飯盛山の頂部とやや東側に下ったところに古墳が一基ずつあり、「飯盛山古墳群」と呼ばれている。飯盛山山頂には飯盛山1号墳があり、直径約一八mの円墳と考えられている。現状で高さ約二・五mを測り、盛土をすることによって墳丘が築かれているようである。葺石の存在も記録されているが、現状では確認できなかった。すでに盗掘を受けているようで、埋葬施設があったと思われる墳丘中央部が大きく凹んでいる。古墳の南側斜面からは盗掘した際に流出したと思われる須恵器の破片が採集されており、これらを図3に示した^⑨。1～4は須恵器で飯盛山1号墳に伴う遺物であろう。

その特徴（TK一〇型式～MT八五型式）から六世紀中頃から後半の年代と考えられるものであ

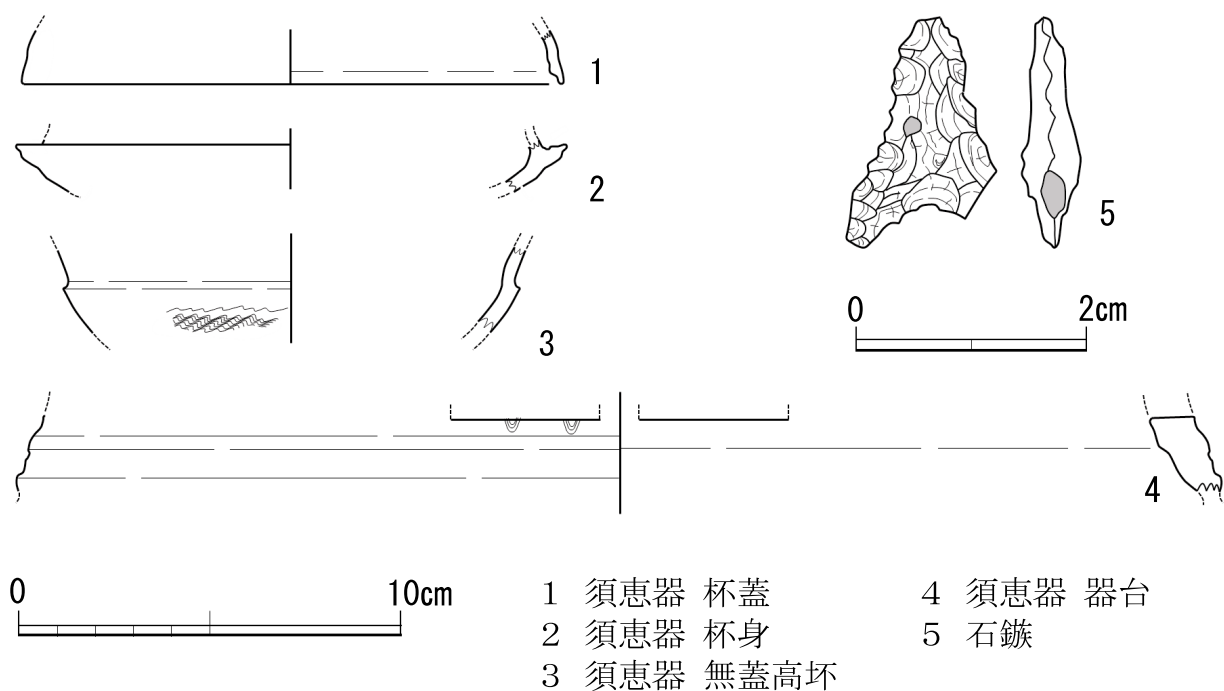


図3 飯盛山山頂採集遺物

り、飯盛山1号墳の築造時期を示しているものといえる。5は縄文時代のサヌカイト製の石鍬であり、狩猟の場で使用されたものであろう。縄文時代の集落は、飯盛山南東側の亀ノ倉池周辺にある亀ノ倉遺跡と考えられ、池周辺のゆるやかな傾斜地から多数の石鍬が採集されている。

飯盛山古墳群と同じ丘陵の東側から亀ノ倉池を挟んで向かい側の丘陵（字「南山」）には「豊倉古墳群」がある。いずれも円墳と考えられており、一五〜二〇m程度の墳丘で、埋葬施設のほとんどが不明であるが、豊倉5号墳のみ箱式石棺の存在が指摘されている。いずれも出土遺物が不明で、築造時期を明らかにしたがたいが、尾根上に立地し、横穴式石室の存在を示すような石材が認められないことから、木棺や石棺を直葬した埋葬方法と考えられ、飯盛山1号墳と近い六世紀頃に築造されたと考えられる。ただし、豊倉7号墳だけは山麓の緩やかな南斜面に築造されており、七世紀代に築造された可能性がある。石棺が露出していたようであるが、現在は確認できなかった。

次に、風土記が編纂された奈良時代の遺跡とし

て、飯盛山の丘陵東側に位置する「殿垣内遺跡」がある。万願寺川西岸の段丘上に立地しており、弥生時代～中世までの複合遺跡で、発掘調査が行われた結果、奈良～平安時代の建物跡が確認された。奈良時代の出土遺物には、漆を塗布する際にパレットとして使用されたと考えられる土師器杯が含まれており、漆を使用する工房の存在が想定されている⁽¹³⁾。

このほか、当地域周辺における遺跡は当地から東側の万願寺川流域に集中しており、西側の下里川流域は希薄である。南側に隣接する丘陵には七世紀前葉の窯跡（中村窯跡群）が二基存在するが、やはり東側の万願寺川に向かって開いた谷を利用して築かれている。このような万願寺川流域に遺跡が集中するという傾向は、五世紀の空白期が存在するものの、弥生時代から顕著である⁽¹⁴⁾。

一方、鶉野台地上では一部の縁辺部を除き弥生時代以降の遺跡は未確認で、まさに「野」であった。「飯盛」関係の字名が存在する地点も同様である。その意味で飯盛山古墳群は台地上にある独立丘陵上に築かれ、集落から離れた特異な場所に

立地しており、特に飯盛山1号墳は最も万願寺川から西側の奥に入り込んだ場所にある点で注目すべき古墳であるということが出来る⁽¹⁵⁾。

二 「飯盛嵩」 伝承という主観的景観

『播磨国風土記』に記載された「飯盛嵩」であるとされる飯盛山には、特異な立地を示す飯盛山1号墳が築造されている。このような場所に築造された理由としては、立地が墓地として不向きである以上に、美しい円錐形の山頂に墓を築くことに意味があったのであろう。そして、その墓のある飯盛山に対する眺望は万願寺川のある東側からではなく、当時は野であった鶉野台地上の西側からの方が優れている。人々がそのように認識したことは、「飯盛」に関する字名が飯盛山の東側に集中していることから明らかであるし、現在の眺望もそのとおりである。

このような地理的、歴史的環境の中にあつて『播磨国風土記』に「大汝の命の御飯を、この嵩に盛りき」として「飯盛嵩」が記録された。それ

は多くの景色の中から円錐形の美しい山容を主観的にとらえた結果である。そして、ここで注意すべき点は大汝命の「御飯」を盛った結果、「嵩」になったのではなく、「嵩」に大汝命の「御飯」を盛った、と記載されていることである。この「嵩」に盛ったという「御飯」は飯盛山の山頂に盛土された飯盛山1号墳をイメージした説話である可能性がある。決して規模の大きな古墳ではないが、均整のとれた飯盛山の頂部に盛土された古墳は目立った存在であったろうし、古墳はそれを期待して意図的にあえて特異な場所に築造されている。問題は、飯盛山1号墳が六世紀中頃から後半に築造され、風土記に記載されるまで約一五〇年が経過しており、飯盛嵩の説話が形作られたころに墓としての認識があったかどうかである。¹⁶⁾

なお、同条の「粳岡」や、揖保郡香山里条の「飯盛山」のように、丘陵に対して他では「山」「丘」「岡」「阜」が多く使われているが、檜原里の「飯盛嵩」では「嵩」が使われている。他に「嵩」が使われている地名としては宍禾郡御方里条の「黒土志爾嵩」がある。比定地が複数あるた

めにその形状は明らかではないが、いずれの比定地も標高八〇〇〜一〇〇〇m以上の高い山であり、そもそも本来の「嵩」の意味は高い山のことである。それに対して、標高一二三mと決して高い山とは言えない飯盛山が「嵩」と呼ばれたのは、「たけ」のもつ他の意味である「傾斜が大きく、且つ露岩の多い山」や「信仰と関係ある山」¹⁷⁾であるために用いられたのではないだろうか。美しい山であることと、古い墓が存在することも含めて信仰の対象となっていたために「嵩」の文字が用された可能性も指摘しておきたい。

現在、飯盛山の北東谷筋に「正一位 三盛大明神」という稲荷社が鎮座している（写真2左上）。稲荷社は国内に広く分布しており、こうした信仰が奈良時代から継続しているとは言えないまでも、飯を盛った伝承地に稲を象徴する稲荷社が鎮座するのは興味深い¹⁸⁾。人々がこの飯盛山を信仰の対象とする普遍的な景観認識の結果であると言えよう。

また、同条にある「粳岡」の比定地「糠塚山」は、当地から南南西方向に約七kmの位置にある。この糠塚山の麓を中心に糠塚古墳群が分布してい

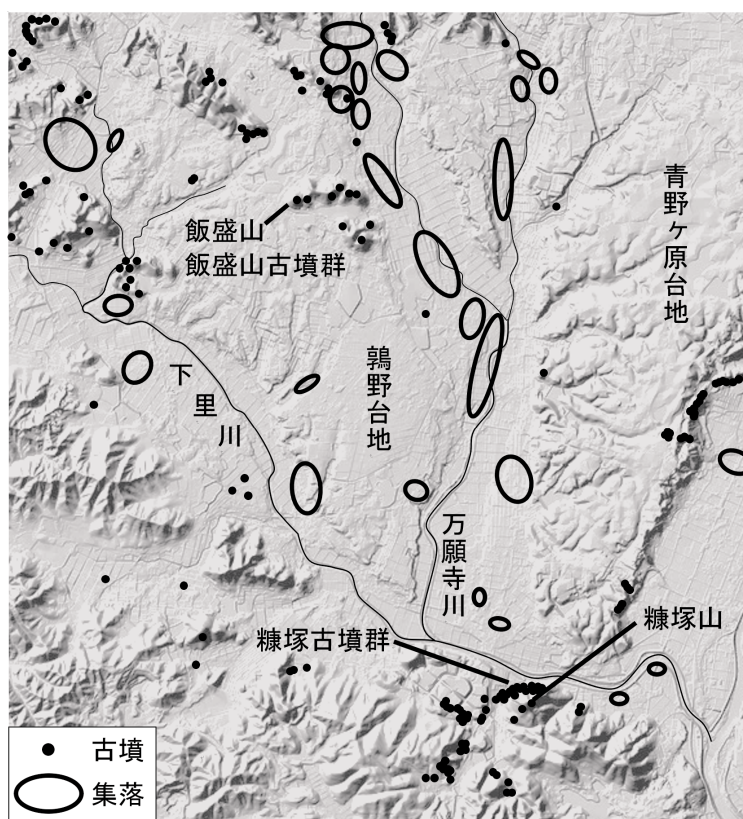


図4 後期古墳と集落分布図

るが、永井信弘氏はその古墳群と周辺の集落を検討する中で、『播磨国風土記』では「粳が墓で、岡が粳（墓）の集合体」（神前郡多駝里条）¹⁹と理解されていること、さらに糠塚古墳群周辺には集落が認められないこと（図4）²⁰から、「粳岡」について、「（下鴨里の）下鴨村の村人達の墓が（檜原里の）この粳岡にもあったと当時の人々に認識されていた（かっこ内は筆者注）」（賀毛郡檜

原里条）²¹として、風土記に記された「粳」の伝承は先祖の墓と認識した上のものであるとされた。²²

永井氏の説に従えば、飯盛山の伝承についても、飯盛山1号墳が墓であることを認識した上で稲作に関係した信仰が存在した可能性が考えられる。すなわち、『播磨国風土記』が記された当時の人々は、野から見える優れた自然の景色、つまり視覚から得られた情報に対し、特定の意味や価値を見出そうとした結果、大汝命、稲作、祖先神、という三者を結び付け、その伝承を含めて主観的に景観をとらえ、それが風土記に記録されたと言える。『播磨国風土記』からは、当時の人々が自然景観をこうした様々な伝承を伴って認識していたことがうかがえる。表1は賀毛郡条に記された景観要素を自然景観と文化景観に分け、さらに前者を地理と動植物に分けて示した。こうしたいずれの景観要素も多くは神や天皇の行為を伴いつつ地名説話の中にある。

おわりに

『播磨国風土記』には多くの地名が歴史的なストリーにひもづけられて記されているが、地名を介することで様々な記事を現在の場所と結びつけることができる。さらに、その土地に残された遺跡をはじめとする記念物とも関連づけることができ、当時の人々が認識していた歴史的背景を併せ持つ景観把握に迫ることができる。当然、風土記に記された地名や景観要素は当時存在したものとごく一部であり、事実としての景色ではなく認識された景観である。しかし、事実と認識の差にこそ人々の主観的な地域に対する意識が反映していると考えられる。

このような考え方は古地図の分析を通して製作者の、あるいは同時代の人々の空間認識を分析、考察する研究と近い。こうした流れは歴史地理学や日本史学において盛んとなっており、「古地図をテキストとして表現内容とその構造の解読を目指す⁽²³⁾」という新しい古地図研究の成果と刺激になっている。すなわち、地図を「空間イメージを可視

化したもの」とみなし、地図上の景観要素の選択とその形状、配列などを手がかりとして「事実としての景観」と、地図に表現された「認識された景観」とに分け、製作者の空間認識や理解に対して検討するという視角を提示している。

本稿では、こうした古地図研究の視点を風土記研究にも応用し、風土記に記された景観要素を古地図研究における「認識された景観」としてとらえ、そこに奈良時代の人々の意識を見ようとした。今回示したのは、ごく一部でしかないが、今後も同じ手法で各条文に広げること、当時の人々の主観的な景観の復元を試み、時代を認識する一つの手段としていきたい。

表 1 賀毛郡の景観要素

文化景観				自然景観(動植物)										自然景観(地理)																						
苗代	苗	田	村	墓	井	草	笹	粉	柁	真木	木	柞	筍	稲	鮎	穴	猪	鹿	鴨	霧	霜	霰	水		沼	河	川	江	野	地	丘	岡	嵩	坂	谷	山
			456鴨村																456鴨														462煮鴨坂	462鴨谷	461山の岑	上鴨里
			475下鴨村											475稲																			462酒屋谷	462碓居谷		下鴨里
			467品遅部村	465条布の井									469筠	463稲					466鹿																466鹿咋山	条布里
			475玉野村	479墓(玉丘)								470柞																480玉野	471伎須美野	479朝日夕日の隠はぬ地	480玉丘	474稗岡	473飯盛嵩			檜原里
			483この村																							483黒川	481臭江								越勢里	
																		487猪																484山の際	山田里	
			488この村					489粉	489柁	489真木	489菓子のない木																							489菓子のない山	端鹿里	
			491この村	494佐佐御井			495笹葉													493霧	495霜	495霰	490鹹水					491小目野	489塩野							穂積里
		498佃る	497彼の村																							498河の水	497法太の川底								雲潤里	
503苗代	502苗	502田	500草を敷かず苗子を下す田	500この村			501人の刈置ける草																				499川								河内里	
															506五臓がない鮎																					川合里

〈附記〉小稿の執筆にあたり、加西市教育委員会の永井信弘氏から資料の提供と多大なご教示を得た。感謝申し上げます。

(1) 美しい国土建設を考える懇談会(井上孝座長)「美しい国土建設のために 景観形成の理念と方向」一九八四年。

(2) 「飯盛嵩」の「盛」の文字について、平安時代末期に書写されたとされる現存最古の『播磨国風土記』(天理大学所蔵の三条西家本)を見ると「盛」の文字が近年の文字と異なっている。このような「皿」の部分「成」の中に含まれるような字形は奈良時代から平安時代には通有であったようである。

①木簡番号 二八四三

出典 『平城宮木簡』2 (奈良国立文化財研究所、一九七四年)

遺跡名 平城宮東院地区西辺

時期 天平勝宝八(七五六)年十一月九日

②集成番号 五〇九

遺跡名 平城宮跡

出典 『平城宮出土墨書土器集成』2 (奈良国立文化財研究所、一九八九年)

土器の種類 土師器 椀

(3) 埴垣節也『風土記』(小学館、一九九七年)。

(4) 全長一〇七mの盾形周濠をもった前方後円墳。古墳時代中期に築造され、地元の高室石製長持形石棺

を直葬する。

(5) 国土地理院のウェブサイト 地理院地図(電子国土Web) 陰影起伏図を利用した。

(6) 『加西市史』第三巻本編3付図(加西市、二〇一〇年)。

(7) 国土地理院の空中写真(一九六五年八月二六日撮影、MKK652X-C5-8)を利用した。

(8) 図は平成一五年三月発行の『加西市全図』四二・四三・四八・四九を使用し、作成した。

(9) 兵庫県教育委員会『兵庫県遺跡地図』、二〇〇二年。

(10) 千葉豊「加西の旧石器・縄文時代 加西の旧石器時代・主要遺跡の解説 豊ノ倉遺跡」(『加西市史』第七巻 史料編I(加西市、二〇一〇年))。

(11) 前掲注(9)に同じ。遺跡番号300158。

(12) 加西市教育委員会所蔵。許可を得て掲載した。

(13) 森幸三「加西の古代 主要遺跡の解説 殿垣内遺跡」(『加西市史』第七巻 史料編I(加西市、二〇一〇年))。

(14) 加西市史編さん委員会『加西市史』第七巻 史料編I(加西市、二〇一〇年)。

(15) 他に鶉野台地上に築かれた古墳に、東高室古墳や円山古墳群があるが、これらは下里川から北東方向に延びる谷筋に面している。万願寺川と下里川の両流域をつなぐ道に面していた可能性が考えられる。

(16) 同じ檜原里には、葺石のある古墳が「根日女」の「墓」として認識されている。その墓が四〇〇年頃に

築造された玉丘古墳であるとすれば、実に三〇〇年以上にわたって墓としての伝承を残していることになる。もともと、玉丘古墳は全長一〇七mの前方後円墳であり、規模の違いは明確である。

(17) 日本大辞典刊行会『日本国語大辞典』第一三巻(小学館、一九七五年)。

(18) 坂江渉氏は「祭神の名前は変わっているが、かつてこの山(＝飯盛山)が人々の信仰の対象となり、定期的に祭られていたことの証しになるのではなからうか」(かつこ内は筆者注)と三盛大明神の稻荷社に対して評価している。

坂江渉「飯盛嵩と神のご飯」(『加西市史』第一巻本編1考古・古代・中世(加西市、二〇〇八年))。

(19) 「粳岡者、伊和大神与天日杵二神、各発軍相戦。尔時、大神之軍、集而舂稻之。其粳聚為丘。其籩置粳、云墓、又云城牟礼山。」(粳岡は、伊和の大神と天の日杵の命とふたはしらの神、各軍を發して相戦いましき。尔時、集いて稻を舂きき。その粳、聚りて丘と為りき。その籩き置ける粳を墓と云ひ、又城牟礼山と云ふ。)前掲注(3)より。

(20) 永井信弘「後期古墳群と集落」(『糠塚古墳群』加西市教育委員会、二〇〇七年)の付図を改変した。

(21) 「粳岡。右、号粳岡者、大汝命、令舂稻於下鴨村、散粳飛到於此岡。故曰粳岡。」(粳岡。右、粳岡と号くるは、大汝の命、稻を下鴨の村に舂かしめしに、散りし粳、この岡に飛び到りき。故れ、粳岡と曰ふ。)

前掲注(3)より。

(22) 永井信弘「後期古墳群と集落」(『糠塚古墳群』加西市教育委員会、二〇〇七年)。

(23) 渡邊秀一「山城国葛野郡班田図に描かれた古代景觀——加筆内容をめぐって——」『文学部論集』第八六号(佛敎大学文学部、二〇〇二年)。